

THE MUSEUM OF ART, KOCHI

KENBI LETTER

ケンビレター

no. 104

2019.winter

特別号



2020(令和2)年1月2日 展示棟再オープン!

高知県立美術館の展示棟が2020年1月2日より再オープンします。

企画展は「tupera tupera」がスタート。1月3日は神楽もありますので、ぜひ新しくなった美術館へお越しください。※1月2日はプレゼントもあり!

『つくってみよう!へんてこピープル』(2007年 理論社) ©tupera tupera

高知県立美術館
THE MUSEUM OF ART, KOCHI

Exhibition Information

tupera tupera



「しましまじま」(2006年 ブロンズ新社)



『ワニーニのぼうけん』(2008年 婦人之友社)



『しろくまのパンツ』(2012年 ブロンズ新社)

Tatsuya Kameyama × Atsuko Nakagawa

斬新なアイデアで、ユニークな創作を続けるtupera tupera。

再オープン後、初めての企画展「ぼくとわたしとみんなの tupera tupera 絵本の世界展」は、当館では久しぶりの絵本原画を中心とした展覧会です。2017年、横須賀美術館でスタートし、各地で人気を博してきた本展は、8会場目となる当館が最終会場です。亀山達矢と中川敦子によるユニットtupera tuperaは、布雑貨のブランドとして2002年に活動を始めました。大学時代から絵を描いてきた亀山の絵柄を、テキスタイルを学んだ中川が縫い込んで作ったマフラーが二人の初めての共同制作でした。

当初は手作り雑貨を中心に活動の場を広げますが、展示会を訪れる来場者の勧めなどがきっかけとなり、絵本作りを始めました。2004年に自費出版した『木がずらり』は、「飾れる」をコンセプトに作られたジャバラ状の絵本です。雑誌の切抜きや、シルクスクリーンで刷ったり、クレヨンなどで描いたパーツをコラージュした木々が並び、屏風のように広げて楽しむことも。手作りの雑貨やインテリアから始まったtupera tuperaならではのモノづくりへのこだわりが絵本の随所に感じられます。



©tupera tupera

斬新なアイデアで、ユニークな新作を毎年作り続けるtupera tupera。二人はアイデアのキャッチボールで構想を固め、編集者、デザイナー、印刷関係者など、様々な人の協力を得て、1冊の絵本が完成すると語ります。2013年、本に赤いパンツをはかせた『しろくまのパンツ』の「第18回日本絵本賞読者賞」受賞を皮切りに同作は「第2回街の本屋が選んだ絵本大賞グランプリ」など数々の賞を受け、注目を集めます。続けて、人気者パンダの秘密を暴いた『パンダ銭湯』が「第3回街の本屋が選んだ絵本大賞グランプリ」を受賞。2018年には、地球から831光年離れた惑星キャベジに住む野菜動物たちを紹介する『わくせいキャベジ動物図鑑』が、「第23回日本絵本賞大賞」に輝きました。そして2019年、「第1回やなせたかし文化賞大賞」を受賞し、今やその作品は英語やフランス語など、世界11言語に翻訳され、愛読されています。世界的に活動していく中でも、tupera tuperaが大切にしているのは読者との交流です。絵本の楽しさを伝えるトークイベントや、モノづくりと一緒に楽しむワークショップなど、全国各地で交流を続けています。



『パンダ銭湯』(2013年 絵本館)

本展では、初期の絵本、さまざまなモチーフの絵本、絵本のつくり方、イラストレーション&アートディレクション、tupera tuperaのものづくり、工作&ワークショップの6つの章に分け、初期から現在に至るtupera tuperaの軌跡を作品約300点でたどります。絵本ではわかりにくい布や紙の質感、貼り絵やコラージュを駆使して彩られた色鮮やかで、細やかな手仕事の世界をじっくりお楽しみください。文・長山美緒(当館主任学芸員)



『かおノート』(2008年 コクヨ)

来館時のtupera tuperaのお二人



ぼくとわたしとみんなの tupera tupera 絵本の世界展

2020(令和2)年1月2日(木)~3月8日(日) 9:00~17:00(入場は16:30まで) 会期中無休

観覧料:一般前売880円、一般当日1,100円(880円)、大学生当日800円(640円) 高校生以下無料

()内は20名以上の団体割引料金。*年間観覧券所持者は無料。*身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、難傷病者手帳及び被爆者手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市の長寿手帳所持者は無料。

主催:高知県立美術館、毎日新聞社、KUTVテレビ高知 協賛:株式会社ライフアートフックス 協力:(有)ヤスタフォトスタジオ、公益財団法人やなせたかし記念アンパンマンミュージアム振興財団、認定特定非営利活動法人高知こどもの図書館

後援:高知県教育委員会、高知市教育委員会、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知、高知シティFM放送

ついに
再オープン!!
改装中の「県美の取り組み」

高知県立美術館展示棟は、2019年4月1日から
吊り天井の耐震工事のため休館していました。
休館中の9か月間の活動をご紹介します。

取り組み_01

出張プロジェクト**県美コレクション出張プロジェクト報告**

「県美コレクション出張プロジェクト」は、2019年4月から12月までの展示棟の休館中、休館中だからこそできる活動の一つとして立ち上がった企画です。内容は、高知県内にある公立美術館に作品を貸し出し、一緒に展覧会を作ることで高知県立美術館のコレクションを幅広い地域の方々に楽しんでいただこうというものでした。

準備段階で特に力を入れて取り組んだのは、作品の輸送と展示の安全確保でした。たとえば、美術館内で展示する際には問題なかった作品の額装も、車で長距離の輸送をするにはそれなりの振動に耐える細工をしなくてはなりません。一般論として展覧会の開催は作品に負担をかけるものですが、今回の展示は日ごろ館外に貸し出す機会の少ない作品の出品が多かったこともあり、特にその懸念がありました。その対策として小さな作品から大きな作品まで、貸し出す作品に輸送時の振動を軽減し、裏面を物理的に保護する裏板を新たに装着しました。このような作品の展示と保存のせめぎあいに一丸となって真正面から向き合ったことは結果として私たち学芸員のスキルアップにつながりました。

また展覧会期中、中土佐町立美術館、芸西村筒井美術館では、ギャラリートークや地元の学校の子どもたちと一緒に展覧会を見学するなどの関連イベントを開催し、日ごろなかなかお付き合いのない開催地域の方々と交流することができました。11月から年末にかけて開催した四万十町立美術館の洋画名品展では、四万十町出身の今西中通や、高知の洋画の名品に加えて、「洋画名品展」というコンセプトに合わせて、いの町出身の澤村正鹿氏から高知県立美術館の前身である郷土文化会館に寄贈された洋画の名品コレクションも久々の公開となりました。各々の美術館が日々行っている創意工夫に学ばせていただく場面も多数ありました。

このように、展示を機に「県美コレクション」と改めて向き合い、各地域の視点をお借りしながら新たな角度からコレクションに光を当てることができたこと、そして一緒に展覧会を作ることをしなければ実現しなかったあらゆる種類のコミュニケーションが地域をまたいで生まれたことが、この企画の一番の収穫であったと感じています。 文・中谷有里(当館学芸員)

●春・夏

中土佐町立美術館「山本倉丘・生命の造形」2019年4月11日～5月6日

香美市立美術館「比べる楽しみ・対話する絵画」2019年4月13日～5月19日

中土佐町立美術館「高知県展萌芽の時代」2019年5月11日～6月2日

芸西村筒井美術館「筒井広道・里帰り展VOL.2」2019年4月21日～6月23日

●秋・冬

四万十町立美術館「高知県立美術館洋画名品展」2019年11月2日～12月13日

香美市立美術館「美術の森へようこそ」2020年2月8日～3月22日



中土佐町立美術館でのギャラリートーク



貸出作品に裏板を装着する様子



芸西村筒井美術館にて小学校来館の様子

取り組み_02

フランク・ステラ作品の修復**当館きっての大作、《ピークオド号、薔薇薔号に遭う》がツヤツヤに！**

美術館に入って最初に出会う作品、それがアメリカ人アーティスト、フランク・ステラによる《ピークオド号、薔薇薔号に遭う》です。縦横共に4メートルを超える本作は、カラフルな塗装が施された7つの金属製レリーフによって構成される迫力満点の半立体作品。93年の開館以降、長らくエントランス・ホールに常設設置されていましたが、近年では経年による塗装の剥がれや埃の堆積による汚れが目立つようになっていました。そこで今回の閉館期間中に、レリーフ群の修復を行いました。 文・塚本麻莉(当館学芸員)

1



全体図

2



どのレリーフが一番手前に位置するのかを確認します。まずは一番下のレリーフから取り外すことになります。

3



解体作業で大活躍したのは日本通運株式会社の作業員たち。上部のレリーフは足場を組んで複数人で持ち上げ、ゆっくりと下に降ろします。

4



基底部を壁から取り外す様子。全体が手前に倒れてこないように上辺をサランでしばり、数人の作業員が階上で支えながら、作業を進めました。

5



レリーフを解体した後はコンディション・チェック。写真で見ているのは展示時は見えない裏の部分。鮮やかな塗装はレリーフの裏にまでしっかり施されているのです。

6



作品修復を担当したのは修復家の大原秀之氏。レリーフ同士の接合部やボルトの周辺には塗装の剥がれが多くみられました。写真は修復用接着剤をめぐれた塗膜の隙間に筆で注しこむ様子。

取り組み_03

音声ガイド準備中！**高校生が読む音声ガイド。常設展示作品に準備中です。**

2018年度の展覧会「ニュー・ペインティングの時代」関連企画として行った「高校生が読む音声ガイド」は、当館初めての試みでした。展示を鑑賞した放送部の高校生が解説を読み、作品を楽しむツールの一つとしてご提供。音声ガイドを利用した方からは「分かりやすく、楽しかった」「説明をききながら鑑賞できた」とたいへん好評でした。再オープン後は館内に常設展示している作品に音声ガイドをつけるべく準備中です。引き続き音声ガイドを読む高知中央高校放送部の生徒の皆さんには、前回の経験を踏まえて意欲的に取り組んでいます。完成をお楽しみに！

文・柳澤宏美(当館学芸員)



常設展示作品の音声ガイド収録中！



原稿の読み合わせ中



「ニュー・ペインティングの時代」展を鑑賞する高校生



取り組み_04

星加コレクション整理

整理ビフォーアフター

としのり
4月、休館と同時に故星加敏文氏よりご寄贈いただいた資料の整理作業が始まる。状態の良くない資料群を段ボールから出しカテゴリーごとに仕分ける。ハンディーワイパーやアルコール水溶液を使って資料の汚れを取り除く。重複しているものを保管用に選り分け画像撮影、データ入力の後一枚ずつ保護用紙に挟み箱に収納。作業は20種類以上に及び、数の多さに苦戦を強いられる。当初の予想ではポスター1,500点、その他の資料も含めて総数約10,000点との事だったが、作業半ばにして総数は26,000点を超えた。4月から5月にかけ遺族も資料の整理に来てくださり、その際'98高知豪雨の被害に遭った事、幼い頃はよく映画に連れて行ってもらった事、また本やパンフレットに色んなものをよく挟んでいた事など、生前の星加氏に関するお話を聞かせていただいた。実際、作業をしていると本の間から新聞の切り抜きや手書きメモ、黒澤明監督と一緒に写った写真などが出てきた。その他にも寅さんのファンクラブの会員証(会員ナンバー!)やファンクラブ会報に寄せたメッセージ、大正時代の手書きポスターなど貴重な資料が出てくることも…。この膨大な星加コレクションを是非多くの方に見て頂きたいと思う。 文・当館解説補助員



ビフォー／未整理の資料群



作業中／整理した資料のデータを入力。その後、きれいに保管できるようにします

星加コレクションとは

星加コレクションは高知市の映画研究家、星加敏文氏が収集したポスター、チラシ、チケット、パンフレットなどの映画グッズから映画館で使用する宣伝用パネルや写真、映画関係者しか集められない映画の台本やプレスリリースまで、2万点以上にのぼるコレクションです。コレクションの中には全国ロードショー用のポスターだけでなく、高知市内にあった映画館のために作られた館名と上映日が追記されたポスターもあり、星加氏の映画に対する熱い思いと映画関係者との幅広い交流をみることができます。今回、このコレクションをポスターやチラシなどに分類したうえで記録をとり、目録を作成しました。資料に触れることが多かった半年間を通じて、当時の高知県の映画文化の凄さを改めて知ることができました。

文・天野圭悟(当館学芸課チーフ)



アフター／きれいに整理されました!

工事で 変わったこと

文・奥野克仁(当館学芸課長)

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、地震によって引き起こされた津波によって甚大な被害が生じましたが、これに加え、おびただしい件数の吊り天井の落下事故が広域にわたって発生し、多くの尊い命が失われました。高知県ではこの未曾の災禍から得られた教訓を真摯に受け止め、南海トラフ地震が発生した場合の安全対策のため、美術館の第2～第4展示室、県民ギャラリー、エントランスの吊り天井の補強、落下防止の工事を行いました。天井裏での施工のため見た目は変わらないですが、この機会に展示室の天井光は蛍光灯からLEDに変更して省エネルギー化を図るとともに、より繊細な照明が可能になりました(第2展示室は除く)。またこれに併せ、各展示室の壁面の塗り替えも行いました。これまでも部分的な補修は行ってきましたが、過去の展覧会の痕跡ともいべきペンキの塗りむらやバテの埋め痕が目立ってきており、鑑賞の妨げになっていました。今回の全面的な塗り替えにより、展示室は本来の「何もない空間」に戻り、美術品をより美しくご覧いただけるようになっています。



天井工事中!

海外出張報告

イギリス

エジンバラ・フェスティバルとICOM京都大会



「リトル・デス・クラブ」立看板

イギリスのエジンバラで2年に1回、8月のエジンバラ・フェスティバルの期間中に開催されるエジンバラ・ショーケースに今年も参加してきた。エジンバラ・ショーケースは、イギリスの国際文化交流機関ブリティッシュ・カウンシルがイギリスのパフォーミング・アーツを国外に紹介するために、世界各国からプレゼンターを招き開催している。今年は約50の国と地域から約180人が招待されていた。日本からは、当館含めフェスティバル・トーキョーや京都エクスペリメントなどから6人が参加した。ショーケースには30作品がプログラミングされていたが、それらは、同時期に開催されているエジンバラ・インターナショナル・フェスティバルやエジンバラ・フリンジの膨大な上演作品のほんの一部にすぎない。またそれらも、エジンバラ城で開催されているミリタリー・タワーなど、年々のフェスティバルで構成されているエジンバラ・フェスティバルの一つなのである。当館では、過去にジェマ&シルヴィアの「ピノキオ」やマイケル・クラーク・カンパニーの「カム・ビーン・アンド・ゴーン」など、少なからず同フェスティバルへの参加を契機に招聘してきた。今年もまた是非高知に紹介したい作品にいくつも出会った。グラビティ&アザー・ミスの現代サーカス「バックボーン」は来年上演が決まつたし、前回以来上演の交渉を続けているマルク・シャガールの半生を描いたニーハイの「フライング・ラヴァーズ・オブ・ヴィテブスク」や、アニメと俳優が一体となった1927の「ルーツ」も素晴らしいが、今回最も

衝撃的だったのは、ベルニー・ディーター率いるバーレスクショー「リトル・デス・クラブ」だった。ベルニー・ディーターの語りと歌、パンク・ロックの生演奏に乗って、刀剣飲み込み、火炎吹き、軟体サークスなど、一昔前の見世物小屋を現代風にアレンジしたショーが次々と展開されてゆく最高にクールでエキサイティングな舞台だった。興奮冷めやらず帰国した次第であるが、今年エジンバラでは「モメンタム」という日本・スコットランドの交流プログラムにも参加し、エジンバラが文化・芸術で地域づくりに成功し、世界中から目標となっていることや、そのコンセプトを聞くことができた。帰国直後に日本で初めて開催されたICOM(国際博物館会議)京都大会にも参加したが、OECD(経済協力開発機構)とICOMが発行した博物館の役割についてのガイド「文化と地域開発:最大限の成果を求めて」の力強い内容に励まされるとともに、文化資源で地域づくりを図り成功を収めているエジンバラと京都のにぎわいの共通点を感じざるを得なかった。 文・藤田直義(当館館長)

イタリア

ダンスフェスティバル「トリノダンツァ」



トリノダンツァ芸術監督アンナ・クレモニニ氏と劇場の前にて ©TORINODANZA

冬季五輪で一躍有名になったトリノで毎年秋に、旬な欧州のコンテンポラリーダンスが2ヶ月に渡り上演されるフェスティバル「トリノダンツァ」を訪れて自主研修を行いました。イタリアの舞台芸術といえばミラノ・スカラ座を最高峰とするオペラやバレエを先に思い浮かべますが、

「クラシック作品に比べて市民権を十分に得ていないけれども、同時代に生まれてくる新しい表現の底力を信じている」と語る今年芸術監督2期目のアンナ・クレモニニさんの熱意が実を結ぶように、欧洲で今最も注目を集めているピーピング・トムの最新家族三部作「ファーザー」(2014)、「マザー」(2016)、「チャイルド」(2019)の連続上演とその舞台裏を追ったドキュメンタリー映画「サード・アクト」(2019)の一挙招聘を実現し、老若男女が連日客席を完全に埋めるほどの熱狂ぶりにも感化されて帰国の途につきました。 文・松本千鶴(当館企画事業課主幹)

アメリカ

石元さんの足跡を訪ねてシカゴでの出張調査



コロンビア・カレッジ・シカゴ現代写真美術館にて

土佐市育ちの世界的写真家・石元泰博(1921-2012年)にとって、高知に次ぐ第2のホームタウンだったというアメリカ中西部の街・シカゴを訪ねました。現地の美術館やギャラリーに多数収蔵されている石元作品のほか、母校である現・イリノイ工科大学や所属していたカメラクラブのアーカイブ資料なども調査しました。交友のあった方から「ヤス(石元さんの愛称)」との思い出話を伺ったり、ループと呼ばれる高架鉄道に囲まれた都心部やビーチなどの作品の撮影地、住んでいた地域に足を運んだりと、まさにシカゴでの石元さんの歩みを一つずつ辿るようでした。石元さんのモノクロ写真を通してしか知らない街がぐっと身近な存在になりました。 文・朝倉芽生(当館学芸員)

MUSEUM HALL INFO

美術館ホール お知らせと報告

NEWS 01

2020年1月22日(水)～26日(日)5日間／20本
冬の定期上映会「天才！木下恵介監督特集」

小津安二郎、溝口健二、黒澤明と並ぶ日本映画の巨匠、木下恵介監督の作品を20作品一挙に上映します。お薦め作品は土日にまとめてあります。土日に加えて平日も上映する「二十四の瞳」「喜びも悲しみも幾年月」「永遠の人」と、3時間以上の長さのため1回しか上映できませんが「香華」は特にお薦めです。とりわけ国民的映画「二十四の瞳」は昔見たことがあるという方は多いでしょう。では内容は覚えておいででしょうか？十二人の児童と先生の心温まる交流の映画？全く記憶違いです。戦争に駆り出される男の子や貧困から奉公に出される女の子たちの苦難の半生を描いた大感動作なのです。他の作品も涙なくして見ることはできません。天才と称されるカメラワークや自由自在な演出を是非この機会に！全作品35ミリフィルム上映です。文・藤田直義（当館館長）



「二十四の瞳」©1954 松竹株式会社

TOPICS

映写機をメンテナンスしました！

世界的に映写機の生産は中止となり、今や運命の時を刻々と迎えている映画フィルムの世界。しかしソフトとしては圧倒的にフィルム作品の方が多いのです。フィルム上映の環境を守るために今年も東京から技術に来ていただき映写機の保守点検を行いました。フィルムで見る映画の世界を今後もお楽しみください。



NEWS 02

2020年3月14日(土) ピーピング・トム「マザー」
一夜限り！この冬見逃せない、奇矯なスペクタクル

世界中の劇場が招聘を心待ちにする、ピーピング・トム。“褒め言葉”として、やや陰気な形容で賞賛を集める彼らの作品は、英語で“覗き見”を意味するカンパニー名に起因するのでしょうか。人間の衝動が引き起こすスキヤンダラスな情景から、クスッと笑ってしまうユーモラスな出来事まで、次々と変容する舞台に露わになっていきます。「マザー」は、カンパニーの主宰の一人、ガブリエラ・カリーソ（写真左）の母の葬儀を原体験に制作した《家族三部作》の二作目。20年目を迎えたカンパニーこだわりのメンバー全員による対等なクリエーションから、母親像は一つから複数へ、家族や母になること、母子の関係、母性など幾層にも拡張され、極限にまで高められたダンス、演技、声楽をもって観客に迫っていきます。

映画製作で使われる効果音の技術フォーリーの実演を劇中に織り込んだこだわりも見逃せません。本公演では、65歳以上の紳士淑女の現地キャストの公募や、ダンス、声や演技のワークショップを予定していますので、どうぞ奮ってご応募ください。文・松本千鶴（当館企画事業課主幹）



左:ガブリエラ・カリーソ 右:フランク・シャルティエ
©Jesse Willems

REPORT

1

11/3(日) 作曲・馬場法子『Nopera AOI 葵』
全編版日本初演 主演・青木涼子
10/12(土)「青木涼子による能レクチャー」報告



公演&アフタートーク

2

5月17日(金)
大谷康子＆イタマール・ゴラン
デュオ リサイタル

全国12か所を回るツアーの一環として、開催された本公演は大谷さんの心の故郷高知県でも大盛況でした。世界的なピアニスト、イタマール・ゴランと究極のデュオ。1708年製作の愛器ピエトロ・グアルネリと世界で3本しかないというナポレオン三世のコレクションの弓を使って弾く演奏は感動の輪を広げました。

4

8月24日(土)25日(日)
夏の定期上映会
「怪奇と恐怖の饗宴」

ウルトラマンで有名な円谷プロが1968～70年に製作した「怪奇大作戦」と「恐怖劇場アンバランス」から選りすぐりの作品を上映しました。県外から多くのファンが駆けつけ、会場は熱気に包まれていました。また、当上映会は、高知県立歴史民俗資料館「昭和から平成へ」展の関連企画として開催。そのご縁もあり、8月12日(月・祝)に歴史民俗資料館にて、うちわ作りワークショップ「ゴー！ゴー！うちわ」を行いました。こどもを中心に200名を超える多くの方に参加いただき終始大盛況でした。

3

6月7日(金)～9日(日)
春の定期上映会
「イタリア映画特集」

公開されて以降ほとんど見る機会のなかった今回の上映作8本。歴史活劇やイタリア式艶笑喜劇など、いかにジャンル映画を作ろうとしていたかが良く分かりました。中でも大注目はミュージカル大作「ナポリの饗宴」。ハリウッドに負けじのこの作品には驚かされました。

5

10月19日(土)20日(日)
秋の定期上映会
「アラン・ロブ＝グリエ特集」

名前と文学作品は世界的に有名なのもかかわらず映画監督としての作品は公開されていなかったために長年謎に包まれていました。物語を語るのではなく映像と言葉と音楽と編集で物語そのものを解体していくという試み。「快楽の漸進的横滑り」などまさに頭の体操。今回上映され、これで作品も浮かばれます。

文・浜口眞吾(2,3,5)、秦泉寺なほ(1,4)